
歪wing

悠栖

PDF小説ネット
Byウメ研究所
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

歪Wing

【コード】

N1015D

【作者名】

悠栖

【あらすじ】

羽をなくした天使は、空を自由に飛べなくなったらしい。そんなもん、俺の知ったことか。

久し振りに行った学校に傘を置いてきて、駅からコンビニまで走って、掴んだビニール傘は最後の一本だった。

「すみません、傘置いてませんか」

「ごめんなさい、全部売り切れちゃって……」

申し訳なさそうな店員の声に振り返る。

……ちえっ。目が合っちゃったか。

「あの、どうぞ。僕家近いんで」

本当は十分ちよつと歩くんだけど。

傘を欲しがっていたのはベビーカーを押している女性だったから、譲るほかなかった。

「ありがとうございます」

何も買わずにコンビニを飛び出した。

【・・・歪wing・・・】

すぐに踏切に引っ掛かり、立ち往生してしまった。

目の前には湿気よりもベタベタしたカップルがいて、青色で自分達の首から上を隠して抱き合っている。

こりゃ絶対風邪ひくな……。

雨に打たれたイライラする頭で、電車が通り過ぎた踏切の奥を見る。
やる。

ぎょっとした。

「なに、あれ」

この土砂降りの空の下で、俺と同じように立ち尽くしている奴が居るのだが、濡れていないのだ。

屋根も傘もない。なのに髪はさらさらと流れ、纏う衣服も濡れている。

そいつは男か女かわからなかった。

サイズの大きいTシャツにデニムパンツ。胸がないので男かとも思ったが、それにしても骨の線が細すぎる。髪の色は栗色で、ショートカットが円らかな瞳を映えるようにしていた。

見ないふりするか。うん、そうしよう。

非現実的なものは無視することに決めている。

駆け足で通り過ぎると、その濁いた体は信じられない行動を起した。

「ねえ、傘に入れてあげようか」

両肩に体重がかかり、白い腕が俺を包みこんだ。

「はっ?」

それと同時に、俺の頭に叩きつけていた雨粒はからりと姿を消してしまった。

な、なにが、起きているのか?」

「おうちどい」

「えっ?」

「おうち。連れてったげるよ」

一体この人はなにを言っているんだ。

というか、人目につくので抱きつかないで欲しいんですけど。

「あのー……離してもらえませんか」

「濡れてもいいんだ」

「ていうか、何が起きてるのかさっぱりわかんないんですけど」

「おうちに着いたら教えてあげる」

奇妙なことに、俺にのしかかる重力は人一人分もなく、周りの人々は俺達に目もくれなかった。

ふわふわと纏い付く腕が気持ちがいい。

なんだろ、これ。夢？ はたまたおばけ？

「ほら、早く行こうよ」

肩の上のふわふわは、耳元で心地のよい音を奏でる。

俺はそのまま雨を避けて、そいつと一緒に家へ帰った。

「僕、天使なの」

そういつと奴はおもむろに着ているＴシャツを脱ぎだした。

「いや、いやいやいや、何してんの自分」

慌てて止めるが、そいつは既に脱いだ後で、平らな胸板に幾分が
っかりした自分がいた。

「ほら、見て」

自慢気に見せてきたのは、背中だ。

「……………おお」

そこには確かに、天使の羽があった。

でも長さになると七センチ程度。左右も不揃いで、白くない。鳩
のように薄灰色だ。

「なんか……………イメージと違うな」
「そうなの？」

すると天使はくすりと笑って、自分の背中を見るように肩に手を

当てた。

「あくまでキミの印象だよな」

天使が含み笑いをする。

「人間の作ったイメージでしか、僕らは現われない。キミが心に描く天使が形になって、僕が居るんだよ」

「はあ？　つまりお前は幻なわけ？　羽が白くないのは？」

「キミの心が純白とは程遠いんですよ」

なんて失礼なことを言う奴なんだ。

「僕の喋る言葉も、キミのレベルに合わせてるんだよ。キミが言うて欲しいように僕は答えてるだけ」

「なら俺が関西出身なら、関西弁で喋るのか？」

「そんなんじゃない。キミが上品なら僕も上品だけど。別にそうじゃないでしょ？」

「ええまあ」

さつきからこいつに小馬鹿にされてる気がするのも、俺が大した人間じゃないからなのか。

わかりやすい説明だこつて。

「そんで何しに来たの？」

もう時間も時間だったので、俺はカップラーメンにお湯をいれることにした。

「あ、僕も食べたい」
「はあ?!」

どこの世界にカップラーメンを食べる天使がいるんだ？

「お前食べれるの？」
「うん。ちゃんと不浄物が出るから」
「……どこから」
「みんなと同じとこ」

そう言って天使はユニットバスを指差した。

「……ああそう」

イメージで成り立つくせに、人間の予想だにしない事がおまけでついてきている。

それとも俺が
「天使もトイレに行く」と無意識に思っているのか？

ああ、ややこしいなあもう！

「まあまあ、早く食べようよ」

お前が言うか？ と内心困惑しながらも、お湯のふたをめくって箸を割った。

二人でカップラーメンをズルズルとすする。
奇妙な空気が部屋の中を渦巻いていた。

俺はなんとなく、気になっていた事を聞いてみた。

「お前さあ」

「なに？」

「男？ 女？」

天使がぴたりと止まって俺を見つめる。

だってその肌は白くて弾力がありそうだし、まっげは頬に影を落としてるし、唇はぼったりと赤く色付いている。

学生の盛りの俺には毒だ。彼女とも別れたばかりだし。

すぐ近くに届く人肌にすがりついてしまいそうなのだ。

「知りたい？」

奴はにやりと笑った後、座ったままジーパンのボタンを外した。

「え？」

音をたてて、チャックが下りていく。腰を上げてジーパンが膝まで下がる。

俺はその様子に心臓を鷲掴みにされ、身動きが出来なかった。

白く長い脚が電気の下に露わになる。

「ほら」

無邪気に笑う天使は、後ろの床に手をついて膝を割り開いた。

「……え」

その下腹部は、マネキンのようにつるりとして、弾力性など微塵も感じなかった。

しかも尻にはガスの元栓みたいな蓋がひつついている。

これがさっき言っていた、不浄物を出す部分だろうか。

「わかった?」

「あ、ああ」

「男でも女でもないよ。僕は天使。子孫を創る必要なんてないの」

「そ、そうですねー」

「だから掻き回そうと思ったって無駄」

こいつのやることはむちゃくちゃだ。

俺は自分の額を手のひらで抑えて、ほんの少しでも欲情した事を死ぬほど後悔した。

「じゃあ、誰が僕らを創ってるんだと思う?」

カップラーメンを食べ終えた天使は、汁をすすりながら俺を箸で指差す。

どうやら相当育ちが悪いみたいだな……。

「そんなもん、神様じゃねえの」

「あつ、今適当に言ったでしょ」

「でも正解」と言っただけはにやりと笑った。

「神様は地球を産み、海を創り、大地を浮かばせた。海の中に生命のヒントを与え、大地に生活の基盤を置いた。

今それが崩れてきているのは、なんでだと思っ?」

「……は？」

急に羅列された言葉についていけず、俺はまぬけな声を出した。

「じゃあ、わかりやすく質問するよ」

天使は立ち上がって、部屋のテレビのスイッチを入れた。

時間帯は夕方のニュースで、いつものように抑揚のないアナウンサーの声がひとつの事件を取り上げていた。

「さんが殺されました。現在逃走中の息子の　　さんは、以前から親子関係に悩んでいたと……」

ああ、嫌なニュースだな。

でもよくある話だ。聞き覚えのない事件ではない、息子が親を殺すなんて。逆もわかりだ。

何が言いたい、こいつは？

「なんでこの人は、親を殺したんだと思う？」

相変わらず天使は、腹の内が読めない笑顔で問い掛けてきた。

「知らねーよ。むかついたんじゃないの」

天使は首を左右に振る。

「違うよ。関係ないよ」

「じゃあ何よ」

「神様の差し金だよ」

俺の頭に、はっきりと警報が鳴り響くのがわかった。

* * *

ふわふわの布団に包まれて、僕は目を覚ます。

『おはよう』

頭の中に響いてきた声は、穏やかで、そして頑固そうだった。

『今日は二万人減らそう』

歪wing

命の数を調整する時間は、地球で言うとお昼ご飯を食べたあとだ。

どうやら僕は寝過ぎてしまったらしい。

「ごめんなさい、神様。寝過ぎしちゃった」

『いいさ。昨日はお前も頑張っていたから。ほら、見てごらん』

僕は下界が映る泉を覗き込む。

『両国の戦争は激化しているよ』

二万人も減ったら、あの大陸はどうなるのか。

答えは、どうもならない。むしろ人間が減ったら汚染された大陸は喜ぶし、ここにいる僕らには関係ない。

『今日は少し難しいことを頼むよ』

「はい」

『七対三の割合で減らしてくれ』

はっとした。

昨日は運命的に減らすのは、両方とも同じ数だったのに。

どちらかの戦争の味方をするんだ。

「どっちがいいですか」

『どちらでも』

「でも、正しいのは」

『どっちも自分が正しいと思っているね』

こうして生命を調節していることを、人間達は知らないのだろうか。

知ったらどう思う？

怒る？

泣く？

諦める？

でも、後先考えずに動物や自然を殺しているのは人間でしょ。

それらを産んだのは神様なのに。

あれ？

それじゃあ神様は？

いや。神様は僕らの創造主だから……。

自分の創ったものなら壊していいの？

どうしよう。

心を、不安が、闇が、拡がって。

『ああ、ついに』

あまりの痛さに自分の胸を叩いていると、神様が嘆きの声をお吐きになった。

『疑心を持つあまりに、お前は、ほら』

僕は背中に違和感を感じて、横にある泉に映して見てみた。

『羽がくすんでしまっているよ』

そんな。

恥ずかしくて、恥ずかしくて、僕は絶対にはいけない事を冒した。

下界の泉に飛び込んだのだ。

歪wing

どうしよう。僕はもう、天使失格だ。

落ちて行く景色と一緒に、神様の声が響いた。

『疑心がやんだら、帰ってきなさい』

* * *

いつの間にか俺はベッドに横たわっていて、見えるはずだと思っていた天井が何故か見えなかった。

「なんだ？」

「なんでしょっ」

「だから、そこをどけよっ！」

天使が俺の上に跨がる。顔の距離なんて十センチもない。

ところで、俺はこいつに聞きたいことがある。

「おい」

「どかないよ」

「俺の心が汚れているってのは嘘か」

天使の透き通った瞳が揺れた。背中の羽も少し震えた。

今見た夢を、俺は忘れはしない。

こいつが神様とかいう奴を疑ったから、その羽が白くも大きくも
ないんだろ。

「……ばれた？」

「お前が見せたんだろ、今の夢」

「うん」

「なんで」

不敵に笑って、舌なめずりをする天使は　まるで小悪魔だ。

「僕らがこんなことしてるって知ったら、人間はどう思うのかなっ
て。興味があっただけ。僕の羽も白くなればいいなって。

……どう？　気分は」

「最っ悪だよ」

俺は手の甲で視界を塞いだ。

こんな話を聞いたことがある。

どの科の動物にも特有の全体個数には上限がある。

現在残っている生物の年間の平均増殖率はゼロに近い。

それぞれの種が内部に、あるいは周囲に、総数を調節する機能を持っているのだ。

「レミングって知ってる？」

「……知らない」

「可愛い動物だよ。個体数が限界を越えると、みんな揃って死んじやうんだ」

天使は笑ってベッドから降りる。俺は上半身だけを起こして、狂ったそいつを睨み続けていた。

「みんなで行進して海にダイブ。その遺伝子を組んだのも神様さ」

その神様ってやつを、殴れるもんなら殴ってやりたい。

命をもて遊ぶな。総個体数の調節？

人間がこれまで築いてきた歴史は、そんなくだらないもんで調整されていたのか。

「……なんて顔してるの」

唇を噛み締めて俯く俺を、天使は心配したように覗きこんできた。

「信じなくていいじゃない」

「……は？」

「だって、いつだって人間は逃げてきたじゃない。都合の悪いことから目を背けてきたじゃない。そうでしょ？　だって……」

「そうやってズル賢く創ったのも、神様だったのかよ」

少しづつが悪そうにした天使は、今度は小さな子どもに見えた。

「困るのは君達なんだよ？　増えすぎたら、自然も、食料も、土地も家も、取り合いになって憎み合いになる。だから戦争でまた人が減るんだ」

「……満足かよ」

「え？」

こいつの言いたいことは、よくわかった。俺の気持ちも固まった。ならこいつに、人間の反応を知りたがったこいつに、全てを説明してやる。

「俺はどうしようもないくらい虚無感に襲われた。だがな」

「そうだ。」

「これが真実だ。」

「実際どうでもいい」

滑稽だ。その目は限界まで広げられていて、初めて知った事を飲み込むのについていこうと必死だった。

「……………どうでも、いい？」

「ああ。どこの戦争で誰が死ぬように操作されてようと、どうでもいいね。死ぬときは死ぬんだよ」

癌でも、交通事故でも、刺されても撃たれても、いずれ人間は死ぬ。

いがみ合い憎み合いが神様の調整だってどうでもいい。
人生を生きているのは、俺達自身なんだ。

「……………どうでもいい、って」

天使は震えて、頭を抱える。

「そんな、じゃあ、僕は何を疑ってたの」

高揚し、早口になっている。思わず俺は後ずさった。

「何を心配してたの。どうして僕は、何も感じない人間のために、疑って、羽も、黒くなって」

「お、おい」

「なんで。嫌じゃないの。少なくとも僕は嫌だった。まだ生きれたかもしれない動物を、僕らが、殺して」

ブルルルル。

携帯電話の呼び出し音が響いた。天使は体を揺らす。俺は奴から目を離さずに電話に出た。

「もしもし」

……もしもし？ あんた、今すぐ帰ってきて！

「姉ちゃん？ どうしたんだよ、何かあったのか」

……お母さんが、突然倒れて……。

「え？」

視界が、ぐらりと歪んだ。

赤いランプはいつまでも点灯中で、俺と姉ちゃんと親父はただ祈るしか出来なかった。

こんな、タイミングの良すぎることは有り得ない。

あいつだ。あいつのせいだ。
俺の母さんも、あいつらに命を操作されたうちの1つだっていう
のか。

「僕……」

後ろを振り返ると、天使が蒼白い顔をして俺を見ていた。

「僕、僕のせいじゃないよ。そんなことしないもん。仕方ないんだ
もん」

「お前……」

「僕のせいじゃない！」

ばさり。

大きな音を立てて拡がったそれは……まるで、鳥のように真っ黒
だった。

そう、真っ黒。

黒くて大きな死神のような羽が、天使の背中から生えていた。

「いやだ……いやだいやだ、いやだ」

顔を両手で覆って、この世の全てを拒絶している。

天使は　いや、もう天使とは呼べないか。

そいつの瞳から零れる涙だけが、きらきら輝いて綺麗だった。

* * *

人がいずれ死ぬとっておいて、許せなかったのはなぜだ？

雨がまた降り出していた。俺はガラスの向こうを見て、その窓を開けて掌を差し出してみた。

案の定、俺の掌は雲に包まれ、一体何をやっているのかと自嘲の溜め息をこぼした。

「母さん、薬飲む時間じゃない」

「あら、そうね。ありがとう」

手術は成功した。体も回復した。

俺の母さんが死ぬ時間は、どうやらまだ先だったみたいだ。

僕のせいじゃない！

黒く拡がったあの闇は、一体どこまで行ったのか。

天か、地か。どっちにしる俺はあいつには二度と会えなかった。

会えるはずがない。羽を黒くしたのは俺だ。

透明な屋根は頭上に降り注ぐ雨粒を弾き返し、またその骨の先からはばたばたと雫を垂らしていた。

酷い雨だ。奴でさえも濡れてしまっんじゃないだろうか。

それは杞憂か。

何故なら、通りの先にひとつも濡れていないゴミ袋を見つけたからだ。

「なあ、傘に入れてやろうか」

ゴミ袋がのそつと動いたかと思うと、黒い羽が開かれた隙間から見えたのは、変わらず白い顔だった。

黒い天使は、俺の顔を見るなり立ち上がって飛び付いて来た。

「うわーん」
「だから抱き付くなって」
「帰れないよー……」

羽をなくした天使は、空を自由に飛べなくなったらしい。

そんなもん、俺の知ったことか。

「あんたがまだ疑ってるからじゃないの」
「え？」

「それが黒いの。神様とやらを信じてやれば」

俺なんかの言葉に惑わされてないでさ。

「あってるんだろう、たぶん。信じてやれよ」

「……ねえ、神様のやってることって……」

正しいの？

「んなもん知るか。俺は虫酸が走るね」

「そんな……」

「俺の産みの親は母さんだし、勝手に育ってきたし、これからもそ
うだろうな。神様なんて奴、結局何もしてねえよ」

「そんなこと、ないよー!」

あと一息か。

「いや。だって実際は動物達が進化したから今があるわけだし。海とか陸とか戦争とか、生き抜いてきたのは俺達だろ。全てを創ったなんて嘘っぱち、信じらんないね」

「嘘なんかじゃない！」

「じゃあ、神様！」

俺は空に両手を広げ、ずぶ濡れになるのも構わずに大声で叫んだ。

「俺を今すぐ殺してくれよ！。見てんだろ？」

「やめてっ」

「調整とやらに、俺も入れてくれよ！」

「やめてっばああ！！！！」

一瞬、雨音が強さを増した。

天使の体が濡れていく。

「神様は……嘘なんかついてない。間違ったこともしてない」

みるみるうちに、黒い羽が濡れていく。

「神様が創らなきゃ、地球は産まれなかったのに」

ペンキの塗料が剥げるように、黒が落ちていく。

「神様は、やらなくちゃいけないことをしてるんだ！ 正しいんだ
！！」

そうして、泣きながら神を擁護する天使は、びしょ濡れになって
その正体を露わにした。

「……わかってんならさ、そうやって言ってやれば
「でもっ」

「帰れるじゃん。お前」

天使は自分の背中を見て、その目を固まらせた。

白く綺麗な羽が生えていたのだ。

今にも大空へと羽ばたきそうに。

「あ……」

「ほら。帰れよ」

そして見せてくれよ。

天使がその羽を羽ばたかせる姿を。

空へ空へと帰っていく軌跡を。

「ありがとう」

日本中どこを探したって、天使に礼を言われたのは俺一人だけだ。

* * *

「……本日の日本時間午前三時に、大統領は終戦を宣言しました。両国は条約を結び、また……」

テレビ画面に映るいつものアナウンサーは、抑揚のない声で、しかし嬉しそうにその結末を話した。

「続いているニュースです。父親を殺害したとして逮捕されていた被告は、全てを認めると同時に心からの謝罪をすると……」

自分でも気付かないうちに笑みが零れていた。

「へえ」

やるじゃん。お前、何か言ったんだろ？

憎み合いが減るなら、代わりに病気とか増えてもしょうがないかもな。

……なんて思う俺も、あいつに感染したのかも。

「……なあ、神様。俺は痛くない死に方がいいな」

ごろりと寝転んだカーペットの上で、結構真面目にそんなことを言ってみた。

これからも俺はあいつを思い出すんだろうな。

雨が降るたび。

カップラーメンを食べるたび。

悲しいニュースを見るたび。

戦争が起きるたび。

身近な誰かが、死ぬたびに。

歪wing

e n n d
歪wing
【.】

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1015d/>

歪wing

2009年3月24日09時09分発行